

新
歌人群像

木下利玄

咲き定まりて静かなり

古谷智子



佛もなき母

眼さむれば隣の室のはなし声そはわが
上にかかはるらしも

〔銀〕

木下利玄（本名・利玄）は明治十九（一八八六）年一月一日、備中（現在の岡山県）足守藩主の弟木下利永の次男として誕生した。六人兄弟であったが、藩主の死によって、利玄がその名跡を継ぐことになった。跡継ぎがない宗家の養嗣子となった時、まだ五歳という幼さだったが、両親と引き裂かれるようにして、たった一人宗家在任の東京に連れて来られた。それ以後、実父母とともに暮らすことは生涯一度もなかった。

巻頭歌は、後に回想して詠まれたものだが、寂しさに満ちた幼時体験は折に触れて甦り、つねに利玄の歌の根底を流れることになる。

泣き止みて頭のいたきたよりなき幼心
地のふとよみがへる

〔銀〕

上京の際、旧国家老と旧家臣が同行したが、いずれも無骨な男性で、幼い利玄を自由のない教育方針の下に厳しく導いた。当主を育てるといふ「義務的観念から潤いのない厳酷さ

で監視されました」（「道」）と利玄自身が述べ懐するように、母に甘えることの全く叶わな
い、寂しく頼りない幼少期を送らねばならな
かった。養家の夫人もこの時すでに亡かった。
実の母は上京後ついに一度も会うことなく、
利玄七歳の時に亡くなり、実父も利玄二十一
歳の時に上京の夢を抱いたまま病没している。

私はかくして特殊な孤児のような境涯
に成長したのです。後年帰省して父母の
墓に詣で、東京で暮らし度いという望み
を果さずに死んだ父を悲しみ、又はやく
別れ若くして死んだ、俯さえ覚えて居ら
ぬ母をどんなに慕わしく想望したでしょ
う。（道）

少年期の寂しく深い心の淵を覗き見るよう
な一節だ。短歌との出会いは、こうした寂し
さが大きな引き金になった。また上京に同行
した旧家臣の長男の学友に、当時すでに新進
の歌人として活躍していた川田順がいたこと
も短歌への親近感を深めたようだ。こうして
家臣の長男の勧めで佐佐木信綱主宰の「竹柏
園」（現・竹柏会）に入門することになった。

草木への愛着

利玄が東京・神田小川町の佐佐木信綱邸を

訪れたのは明治三十二年十月、十四歳の秋だ
った。前年三十一年には「竹柏園」機関紙
「心の華」が創刊され、翌三十三年には「明
星」が創刊されるなど、短歌革新機運の高ま
った時期だった。利玄はこれ以後毎週末に、
四谷から神田小川町の信綱の許に歌を持参し
て、直接指導を受けることになる。当時二十
九歳の信綱は、『詠歌自在』を元に作歌を指
導し、「急がずたゆまず」「古歌を読む事」
「自分で作る事」等を少年利玄に教えた。
当時まだ中学生だった利玄の詠草をあげる。

人訪はぬ深山のおくのもみぢ葉はおの
が姿をひとりめづらん

中学生の作とは思えないほど静謐で、深い
諦念の漂う歌だ。「ひとりめづらん」という
結句には、特殊な孤児のようだったという利
玄の孤独な境涯が滲み出ている。

厳しい男達ばかりの家に寝起きする寂しさ
から逃れることができたのは、中学に入って
からだだった。当時、学習院では校舎が敷地内
に建てられておらず、四谷区の松浦伯爵別荘
を塾として使用していた。その野趣豊かな主
一館塾に友達十余人と寝食をともにしながら
六年間を学ぶことになり、利玄は初めて少年
らしい快活さを取り戻していったようだ。

物かげに怖ぢし目高のにげさまにさ、
濁りする春の水哉
水ぐるま近きひゞきに少しゆれ少しゆ
れるる小手鞠の花

「私は性来草木花卉に愛着を持つてゐると
いふ程好き」という文もあり、利玄の歌には
植物が多く登場する。小さな動植物に対する
丁寧な観察と細やかな描写は利玄短歌の大き
な特徴の一つだ。それは生来の気質であった



前列左より利玄、妻・照子、妹・寿子、後列左より弟・利朗、利昌、利冬（大正5年）



結婚当時、妻・照子と（明治44年頃）

とともに、少年期の塾での生活環境が大いに影響している。利玄と言えば思い浮かぶ数々の花の歌は、大自然を背景としたものではなく、ごく身近に見られる野の花が中心で男性的なダイナミズムを感じさせる類のものは少ない。

花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹
重たく夢をはなる、

からみあふ花びらほどくたまゆらにほ
のかに揺る、月見草かな

我が顔を雨後の地面に近づけてほしい
まゝにはこべを愛す

この花は受胎のすみしところなり雌薬
の根もとのふくらみを見よ 『紅玉』

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占
めたる位置のたしかさ 『一路』

曼珠沙華一むら燃えて秋陽つよしそこ
過ぎてゐるしづかなる徑 『みかんの木』

花の歌を歌集ごとに集めてみた。特に『一路』の牡丹の歌、『みかんの木』の曼珠沙華の歌は利玄の代表歌として、今なお愛唱されている。この名歌に辿りつくまでの利玄の歌の軌跡が、これらの植物の歌にはよく出ている。

顔を地面に近づけてはこべを見つめて飽きない繊細で感傷的な初期の少年性。その感傷性を出て受胎という現象に向かう花を見つめる科学的で冷静な視線。そして牡丹の位置を静かに把握する精神の深化。曼珠沙華の命の極みと深閑たる道の対照に、濃密な生の力と気品が漂う最後の作品。これらの際立った違いがそのまま四歌集『銀』『紅玉』『一路』『みかんの木』という歌集の特徴を実によく物語っている。利玄の歌は一歌集ごとに飛躍したと評されるように、植物を対象にした作品の比較においても、深化の過程をこのように鮮明に辿ることが出来る。

「白樺」の思潮の摂取

利玄が自己の歌風を確立してゆく上で、大きな影響を受けたのは学習院の回覧誌から発展した文芸雑誌「白樺」の存在だった。

明治四十三年にかつての学友武者小路実篤、志賀直哉、正親町公和らと創刊した「白樺」には、有島武郎、柳宗悦、里見弴など当時の自然主義文学退潮後の文壇を強力にリードした仲間が数多くいた。「白樺」は人道主義、個性主義、理想主義を掲げ、ロダンやゴッホ、セザンヌ、印象派の絵画の紹介などでも幅広い雑誌であり、ここから利玄が得たものは実に大きかった。利玄は散文も発表したが成功せず、同人中唯一の歌人として活躍した。

第一歌集『銀』の孤独な色調を帯びた調和的な短歌世界から、「白樺」の自由な表現の吸収と、結婚による人生の哀歓を経て、第二歌集『紅玉』ではアララギ的なリアリズムと白樺的なヒューマニズムを獲得してゆくのだった。

街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

『紅玉』



左より武者小路実篤、正親町公和、利玄、志賀直哉（明治40年）

近よれば冬木の上に月きたり空さす枝
のありありと見ゆ

鼻の上に少し皺よせわが妻のいとしみ
し子は死ににけるかも

おくつきは並びたれどもうつし世に相
ひ逢はざりし吾子三人はや

初期は窪田空穂、北原白秋、島木赤彦らの影響を受け自由で感覚的な詠風が見られる。その上に結婚後間もなく利公、二郎、夏子という幼い子ども三人を次々に失い、境涯的詠

風が加わった。

二郎を喪った後、大正五（一九一六）年から七年まで照子夫人の慰謝と療養のために京都から山陰、九州方面に大旅行をするが、この間に誕生した夏子もまた喪ってしまふ。大正十一年二月に得た三男利福のみが成長する。しかし、三男誕生の頃から利玄自身が肺結核に罹り病臥の身となり、大正十四（一九一五）年二月、四十歳で没する。

晩年の病は利玄の歌をさらに深化させることになった。病気による社会からの隔離感、対象にむける病者特有の執念、当時住んでいた鎌倉の静けさ、文学への飽くなき挑戦などが利玄調と呼ばれる絶唱を生む源になった。「白樺」が大正十二年三月に廃刊されてからは、白秋や土岐善麿、釋道空らと反アララギ派の大合同誌「日光」を創刊し作品を発表した。

死の直前にすべてを託された五島茂は「利玄の歌の性格にはふしぎに東洋的でなく、西洋的のところがある」と言い、ルドンの絵の東洋的な静かな気稟が利玄の歌に通じている。利玄は東京帝国大学国文科出身で、卒論は「近松世話浄瑠璃研究」だったが、「白樺」で培った広範な西洋的教養を経て、新しい東洋のリアリズムを開拓したといえる。

牛車のつしり重み軋みゆくにつぶれ
てめりこむ道路の砂利音
「一路」
けたたましく百舌鳥が鳴くなり路ばた
には曼珠沙華もえてこの里よき里
「みかんの木」

町を近みくたびれ歩むみちばたにさい
なみ捨てある曼珠沙華の花

一首目の下句、二首目の結句、三首目の四句目は、本来七音であるべきところを四音を重ね計八音になっている。これが浄瑠璃に通じる独特の四四調のリズムで、利玄調といわれている。また、口語的発想や自由な用語の採用など、新分野の開拓を常に怠らず、徹底した推敲を実践した利玄の作歌姿勢は、その気品ある清廉な生き方とともに、今改めて見直されなければならない。

利玄と同じ明治十九年生まれの人歌人に、石川啄木がいる。二人とも上京し、文明開化以後の活気に満ちた都市を背景に新しい歌を模索したが、啄木は苦しい生活の中から、利玄は恵まれた環境の中から歌を詠み、対照的だ。利玄の静謐で深い精神性は際立っている。

（ふるや・ともこ「中部短歌会」選者）